

学生相談におけるカウンセラーの専門性と 多様なアイデンティティ形成に関する一考察

——大学院での臨床訓練と現場をつなぐものとしての「現場性」——

甲南大学学生相談室 西 浦 太 郎

要約

大学の学生相談機関で相談活動を行うカウンセラーは、臨床心理士を養成する指定大学院などで臨床心理の訓練を受けている者が多い。しかし、これらのカウンセラーが学生相談の領域において自らの専門性を構築するにあたり様々な困難が存在することがこれまで指摘されてきた。

本論では、専門性を形成する上での困難を検討するために一つの事例として、筆者が大学院での訓練を経て、学生相談でカウンセラーとして働き始めた頃に直面した困難を取り上げた。また、その後、転機となった職員やカウンセラーとの出会いや、転機が訪れたが故に相談活動において生じた課題を挙げ、一連の過程の分析を通して学生相談領域における専門性について考察した。

最後にカウンセラーが自らの専門性や多様なアイデンティティを築く上で、学生や大学で働く人々などを含めた「現場性」が重要になることを論じた。

キーワード：学生相談、専門性、アイデンティティ

I. 問題と目的

これまで、大学の学生相談の領域では多様な実践活動が行われてきたが、独立行政法人日本学生支援機構（2007）によると、学生相談機関における活動は「専門的學生支援」にあたる。これらの支援の中には、専門性に基づいた心理カウンセリングを始めとする学生への個別支援が含まれ、これまで学生相談の領域においても重要な位置付けにあった。また、より多面的・多層的な学生支援を実施するために個別支援だけではなく、関係する学内の教職員と情報交換を行い、互いに連携する必要性も指摘されている。

これらの実践においては、臨床心理の専門的な観点やアプローチがベースとなるが、対象とする範囲が個人から関係者、大学全体と広く、また大学という教育機関における実践であるため、大学という教育機関や現場に対応可能な「独自の専門

性」が必要になるといえる。

このことを示す例として、米国における学生相談の位置付けと訓練制度が挙げられる。米国では学生相談は、カウンセリングの領域において特定の能力が求められる一つの専門分野とされる(Sharkin, 2012)。また、将来的に学生相談で働くことを希望する学生は、博士課程在学中や博士号取得後に学生相談でインターンシップを行うことが多い(Neimeyer, et. al 2001)。これは、学生相談の現場において有効な能力を培い、自らの専門性を作り上げる上で、修士課程におけるカウンセリングの基礎的な訓練だけでは十分ではなく、より長期に渡る専門的な訓練が必要とされることを意味している。

さて、我が国においては、これまで臨床心理士の資格とは別に、日本学生相談学会が認定する学生相談に特化した「大学カウンセラー」や「学生

支援士」などの資格・研修制度が設けられてきた（日本学生相談学会, 2023）。また、大学で働くカウンセラーや教職員が参加する全国学生相談研修会や、主に学生相談カウンセラーを対象とした全国学生相談研究会議などの研修機会も恒常的に提供されている。これらの資格や、継続的な自己研鑽や資質向上のための制度面の充実は、学生支援に携わる者にとり、学生相談特有の対応力や専門性を形成する上で非常に有益であるといえる。

その一方で、学生相談における専門性の形成に関しては多くの困難が存在し、これまで様々な研究がなされてきた。

例えば、坂本（2012）は、学生相談カウンセラーが長年の実践を振り返り書かれた12本の展望論文「私の学生相談」を素材として、主に「参入期」に着目し、専門性形成における困難に焦点を当て、職業的発達に関する研究を行っている。

また、中島（2015）は、学生相談カウンセラー15名に対する面接調査を行い、カウンセラーが直面する困難を抽出し、そこから「新人期」における成長モデルの提示を試みている。坂本と中島の研究は、大学院を卒業して学生相談の現場で働き始めたカウンセラーが多くの困難に直面している点を踏まえ、その後の専門性形成やカウンセラーの成長に着目している点に特徴があるといえる。

また、学生相談領域全般においてカウンセラーが直面する困難をより包括的に扱ったものに伊藤（2017）の研究がある。伊藤は、様々な年齢や経験を有する31名の学生相談カウンセラーを対象に面接調査を行い、坂本（2012）・中島（2015）の研究を踏まえ、学生相談において直面する「難しさ」に関する分析を行い、カテゴリを作成している。また、経験年数の浅いカウンセラーが直面しやすい問題と、経験年数に関係なく反復して生起する問題とに分類し、それぞれの特徴の検討・考察も行っている。

このように様々な課題がある中で学生相談で働くカウンセラーは、多くの困難に直面しながら

も、そこからの「学び」を通して、自らの資質の向上や専門性を追究しようとする側面も見受けられる（例えば、坂本, 2012、中島, 2015）。言い換えると、困難に向き合う過程の中でしか得られない（身につかない）ものが存在し、それらが学生相談における専門性やアイデンティティを形成する上での重要な要因になっているとも考えられる。

また、大学院での訓練を経て、学生相談領域で働き始めたカウンセラーは一定数いると想定される。そのため、カウンセラーが臨床心理の専門性がまだころもとない時期に、現場で対応可能な学生相談という専門性を求められる状況にいかに向き合い乗り越えていくかの「個別の」内的プロセスを丁寧に追うことは、現場で専門性を獲得し、アイデンティティの形成を考える上で有意義と考えられる。

よって、本論では、一つの事例として筆者が学生相談機関で働き始めたときに直面した困難を取り上げ、その後の転機となった体験について述べる。そして、その中で新たに浮かび上がった筆者の課題や、いかにして筆者なりの専門性・対応力を身につけようとしたかを考察する。最後に学生相談の領域において、カウンセラーの専門性や多様なアイデンティティがいかにして形成されることが可能かを論じる。

なお、本論は学生相談の領域で働くカウンセラーの全体的傾向や一人ひとりの個人差には触れておらず、あくまでも一人のカウンセラーの事例からの論考であるため、筆者の体験が全ての人に該当するわけではないことをあらかじめ断っておきたい。

II. 学生相談室で働き始めたときのこと

1. 筆者の背景と働き始めた大学の学生相談室

筆者が、大学の学生相談室で非常勤カウンセラーとして働き始めたのは、臨床心理士養成の指定大学院で臨床実践の訓練を始めてから5年が経

過した時期であり、臨床心理士の資格を取得した翌年の2011年であった。

当時は、大学院の博士後期課程に在籍し、週に2日、大学でインターカンファレンスや事例検討会に参加し、大学院附属の心理教育相談室にて一般の市民の方を対象に遊戯療法やカウンセリングを行っていた。また、大学の外では、非常勤のカウンセラーとして週に4日働き、生活費を稼ぐという生活を送っていた。学生相談室で働き始めたのは、先輩から非常勤先を紹介されたのがきっかけであったが、最初に「大変な現場だよ」と警告されたのを覚えている。

最初に勤務したのは中規模大学の学生相談室であり、学生相談室の歴史は長く、体制も良く整備されていた。面接は、インターカーはおらず、面接時間や面接の継続の有無は、学生の要望を踏まえた上で、カウンセラーの見立てや裁量に任せられ、相当、守られた環境の中で行うことができた。

また、面接は予約申し込みに加えて、事前予約がなくとも学生が直接窓口に来た場合、担当可能なカウンセラーがいれば、そのまま面接をするドロップインの形態を取っていた。そのため、常時、学生が面接に来る可能性を想定しておく必要があるのも特徴的であった。全体的に各カウンセラーの主体性や裁量を尊重してくれる職場環境であり、面接や実践を行う環境としては申し分なかった。

2. 勤務を開始した当時に直面した困難

a) 学生相談室の控え室

学生相談室には、面接室以外にスタッフが待機し、事務仕事をする控え室があったが、勤務し始めた頃は、その活発な雰囲気には驚かされた。特に新生が多い4月・5月は、大学の学生相談室も繁忙期となり、学生や教職員の相談が多く、控え室の電話が鳴り続け、カウンセラーも常時、その対応に追われていた。その様子は、さながら野戦病院のようであった。

筆者がいた大学院附属の相談室は、クライアントの関係者からクライアントに関する問い合わせの電話がそもそも少ない上に、ケースに関することは、なるべく面接室内やクライアントとの関係の中で行うことを良しとする風潮があったため、控え室で電話で話すこと自体が少なく、かなり静かであったが、同じ控え室でも雰囲気はここまで違うのかとショックを受けたことを覚えている。

また、印象的だったのが、先輩カウンセラーの教職員への電話対応であった。電話口のやりとりを聞いていると、カウンセラーは学生の守秘に関わることを述べず、教職員が学生と関わる上での具体的なアドバイスのようなものが多かった。しかし、筆者には内容をすぐに理解できないものが多く、どこか同じ日本語を話しているようで外国語が話されているようでもあった。電話で話を聞いている教職員もさぞかし混乱しているのかと思いきや、話の最後の方には、カウンセラーの意図が伝わったようで、よくカウンセラーのくさうことことです。よろしく願います」と電話が終了していた。当時は、「学生について何をこれだけ話をするのか」ととても困惑したことを覚えている。

また、当時、大学院の相談室であれば、自分の面接が終わると記録を書き、掃除をして帰るなど、担当する面接以外で待機する必要もなく、自分のペースで完結することが一般的であった。しかし、学生相談室では、「仕事」であるため長時間、控え室にいたことが求められ、控え室での時間をどのように過ごすかも困ることが多かった。また、ケース記録を書いたり、食事をしたりしている最中に学生が突然、相談窓口に来てきて「今から相談できますか?」と言い、急遽、面接が入ることもあったが、そうかと思いきや、学生があまり相談室に来ない時もあり、なかなかリズムを掴むことが難しかった。今となっては、そのしんどさが何に起因するかが分かるが、当時は自分に求められている役割がこれまでと異なるもの

の、それが具体的に何かよく分からず、順応するのにかなり苦勞をしたことを覚えている。

b) 学生や教職員の話を聴く

相談に来た学生とのカウンセリングに関しては、学生の話をお聴きすることがとても難しく感じられた。例えば、学生のお話を聴き、カウンセラーとして学生の「心理的なテーマ」を扱おうと努力をするのだが、結局、それが何だか分からず、学生が何を求めているのか、どのようなことで困っているのかという、「ニーズ」を掴みづらかった。そして、しばらくは、学生との面接は続くものの、次第に学生の来室が途絶えていくことが多くなった。

また、面接が中断になった場合、自分の会い方に問題があったのかもしれないと内省しようにも、何を手がかりにして考えれば良いのか分からず、姿勢を改める上で十分な振り返りが難しかったこともあった。こうして、それまで大学院で学んだ心理面接とは「何か」が違うことをうっすらと感じつつも、その違いを十分に認識できず、また、自分に足りないものが何かが分からずにもがいていたのであった。

また、教職員が学生対応に関して相談を希望する際のコンサルテーションもとても苦勞をした。先述したように、大学院の相談室では、本人以外の関係者が相談に来ることは少なく、学生相談室で教員が突然訪ねてきても、どのように会い、学生について何を話せば良いのか分からずに困惑することが多かった。働き始めということもあり、学内や学部の事情にも疎く、さらに学生のお話の秘密を守らなければならないため、身構えて防衛的になってしまっていた。そのため、非常に縮こまった状態で、狭い範囲の話しかできず、コンサルテーションや連携と呼ぶには程遠い状態にあった。

次第に学生との面接や教職員とのコンサルテーションにも行き詰まり、控え室でも勤務時間内で

いつ新たに相談に来るか分からない学生を待ち、待っている間も、どこに力を入れてどこで力を抜けば良いのか分からない状態になった。また、自分が何をしているのか分からず、混乱し、学生相談室で働き始めた4月以降、徐々にしんどくなり、疲弊をしていった。そして、学生相談室で勤務を始めた最初の1年半は、筆者にとり出口の見えない精神的に大変、苦しい時期であった。

Ⅲ. 転機になった出来事

このような中、筆者に影響を与えたある出来事があった。当時、縁があって別の大学の学生相談室でも非常勤カウンセラーとして働くことになった。その大学の学生相談室では、学生部の職員の方と一緒に働く機会が多く、筆者は、カウンセリングをしながら、学生の守秘義務に抵触しない範囲で、学生の問題や状況に関して意見を求められると、それに応えていた。

あるとき、音信不通になった学生への対応を巡り、関係者でミーティングが開かれた。対応を巡りかなり意見が分かれ、激しい議論がなされ、筆者もカウンセラーの立場から臨床心理学の知見を交えて学生の状態について意見を述べ、全体の意見が出尽くした状態になった。しかし、その職員だけは、誰を責める訳でもなく、眉間に皺を寄せて「どうしたんでしょうね…。学生がしんどくなったのか…。心配です…」とだけ言い、それ以上何も言わなかった。結局、方針に関して答えは出ず、その場は終わったが、職員の何気ない一言は筆者に強く訴えかけてくるものがあった。

この職員は学生のことを自分のこととして心配し、引き受けていたが、自分とはといえば、臨床心理学で学んだ一部の知識だけ考え、明らかに表面的であった。そして、学生が抱える辛さや困難に向き合い続ける必死さが自分には決定的に欠けていたことを痛感させられた。

この職員は非常に有能であり、学生への強い想いを持っていたが、学生のために心を砕くその

「期間」もまたとても長かった。学生の状態が悪化し、登校しなくなった場合でも、その学期だけではなく、次の学期も心配し、学生が中退した場合は、その後の進路のことまで考え、コンタクトを取り続けていた。学生のことを考え、とにかく実際に行動し、関わり続けていたのである。

このような職員の長期に渡る関わりから学ぶことも多かった。カウンセラーの場合、主に学生との面接が中心になるため、面接が中断すると、そのまま学生との関係も終わることが多い。また、面接が中断した場合、カウンセラーのプライドや自己愛も深く傷つけられているため、それ以上、学生やクライアントの後を追って関係に踏み込むことを躊躇する者も少なくない。

本来、難しい学生であればある程、面接が中断した「後」にこそ、教職員や保護者と連携を取るなどして学生の「その後」にコミットし、息の長い支援・関わりが求められるのであるが、これがカウンセラーにとっては案外、難しい。

しかし、この職員の場合は、学生がカウンセリングを始め、他の関係者との関係を断とうとした場合でも、最後まで学生の学業や生活を心配し、粘り強く関わっていた。そこには、物事が思うように進まず、行き詰まっても、一人の人として、学生を最後まで守ろうとする強い意志が感じられた。このようにして、筆者は粘り強く学生と関わることの重要性を知り、さらにカウンセリングだけが全てではなく、面接が中断しても学生のその後の人生は続くことや、学生の人生の中で、カウンセリングがどのような意味や役割があるかを別の角度からもう少し長い目で考えるようになった。

IV. その後に生じた変化

1. 控え室での取り組み

その職員と出会って以降、筆者の学生相談室での仕事への取り組み方が少しずつ変わっていった。それまでは、相談室に開室時間の間際に到着

してから、仕事を始めていたが、早目に出勤するようにし、相談室の開室作業を行い、自分の出勤日以外の連絡事項や、全体向けの共有事項を確認するようになった。事前にケースに関する情報を知り、想定される事態を想像し、それについて考えることで、その後の学生に関する問い合わせや、緊急対応が必要なときに、混乱が少ない状態で対応ができることが増えた。そして、外部との細かい連絡を読むことで相談室が心理相談だけではなく、組織や外部との関係の中で動いていることを改めて認識させられた。

その一方で学生相談では、学生に関する問い合わせが外部からあった場合も、ただスムーズに早く対応すれば良いというわけではない。むしろ、どのような対応が、学生を守ることになるかを慎重に考えて、検討を重ねながら動くことが求められる。その意味で、事前に連絡事項を確認しておくことで、「考える時間」ができ、良い訓練になったと思われる。

また、相談室には対応が難しいケースがいくつかあったが、担当カウンセラーの連絡事項や対応を見聞きすることで、カウンセラー個人としての学生との関わりはさることながら、相談室という「機関」としていかに対応するかを学ぶことができた。

また、控え室での時間の「過ごし方」にも変化があった。以前は、自分が担当する学生との面接が終わると記録を書き、どちらかという「自分の面接」にエネルギーや時間を割いていた。そして、学内のことが良く分からないこともあり、電話もあまり積極的に出なかった。しかし、先に述べた職員と関わって以降、「常に困っている、深刻な状態にいる学生が来る可能性がある」という想定を常に持つようになったため、面接がない時間帯であっても緊張感を持ってその場に臨むようになった。そして、自分から積極的に電話に出たり、突然の相談申し込みがあった場合もなるべく面接に入るように心がけた。不思議だったのが、

積極的に電話に出ると、今までよりも話し手の声のトーンにより敏感になり、ケースの見立ても以前より研ぎ澄まされるようになったことである。面接も電話も全てがつながっているのだと改めて感じさせられた。

全体を振り返ると以前は、自分個人が関わる物事だけを考える自己中心的な態度だったが、そうではなく、学生相談室が「学生のための場である」という認識を持ったことが大きかった。そして、以前は、控え室で「過ごす」という距離のある過ごし方から、その場に「学生のためにいる」という姿勢に変化し、仕事への向き合い方が根本的に変わっていった。

2. 学生との会い方における変化

また、学生とのカウンセリングにおいては、以前よりも学生のことを一人の「人」として尊重するようになった。以前は、カウンセリングでは、どこかその人を「学生」として見ており、自分も関わり方や、距離の取り方に迷いがあった。また、学生からしてみても歳の近いカウンセラーとはどこか話しづらさを感じていたのかもしれない。

しかし、実際に相談に来た目の前の人は、様々な悩みや苦しみを抱えており、何よりも困難な状況を生きている人に敬意を持つことが必要であると感じられた。そして、気づくとある時から学生に敬語を使い、相手を「君」ではなく「さん」付けで呼ぶようになっていた。

相手をどのように呼び、どのように話すかは、カウンセラーの個性や面接のスタイルも関係し、何が良いか一概にはいえない。例えば、友達口調で話す場合、良い面としては、互いの距離を近づけられることがあろう。しかし、不用意に砕けた口調で話すと、学生にはカウンセラーの年齢差や経験の違いが意識され、面接関係における「対等さ」が薄れ、相手の人の話を「素直に聴かなければならない」という心理が働き、自分の考えや気

持ちを話し辛くなる可能性がある。

筆者の場合は、敬語や「さん」付けで話し、相手の主体性を尊重するようになってからは、学生からの自発的な発話が増えた。また、こちらが敬意を払う姿勢に対し、学生側からもこちらに敬意を払ってくれるようになり、面接の時間を守ってくれることが増えた。また、複雑な関係になりそうな場合でも、お互いに敬意を払っていることがベースとなり、面接の場自体が守られることが増えた。松木(2016)は、ある思春期男子の患者に敬語で話し続け、後にその患者が、自分を大人として扱ってくれたことに感謝の念を示したことを述べ、相手を大人として接することが、治療上の重要な転機になったと述べている。これは、面接関係において相互に尊重することがいかに重要で、治療的に作用する可能性があるかを示す例といえる。

次に、カウンセリングにおける変化としては、学生の困りごとに少しでも近づけられるように、とにかく話を一つひとつ聴き、できることを一緒に考える姿勢へとシフトした。また、それまで自分が学んできた臨床心理の理論や概念も一旦、横に置いて話を聴くことに専心するようになった。それ以来、少しずつ「学生が」主体になって話すようになり、カウンセリングの場でもこれまでは話題に登らなかったことが話されるようになった。

恐らくそれまでは、知らず知らずのうちに学生の話をも自分の既知の枠組みやオリエンテーションに当てはめていたため、学生からすれば、自分の話が勝手にある枠組みに吸収され、息苦しさを感じ、自分の気持ちを話させなくなっていた可能性があったのであろう。また、筆者も理論で固まっていたため、学生の話も聴いてもところが動かず、学生の本当の声を感じ取れず、面接自体が生命感を失った、硬直した空間になっていたと思われる。

しかし、ここで、専門性が不要であるといつて

いるのではないことを強調しておく。学生の生死に関わる危機的な状況においては、学生の状態や緊急度を見立てる上で臨床心理学的な理解や医療機関との連携などに精通することは必須である。

しかし、例えば面接関係において一つの心理学の理論やオリエンテーションにのみ基づいた理解が優勢になりすぎると、面接空間がないがしろになり、学生の新たなところの動きが生まれる芽が摘まれてしまうであろう。また、面接の土台となる学生とカウンセラーの「関係性」を築くことも阻害され、面接も早期に行き詰まることは想像に難くない。このように心理学的知見に基づいた専門性は重要だが、学生との関係性に及ぼす影響を十分に留意しなければならないと思われる。

以上のような経緯を経て、継続面接も次第に増え、1日7枠の面接枠も全て埋まるようになり、当時の面接枠では足りなくなったため、学生に頼んで毎週から隔週に面接頻度を変えてもらった。結局、週1日の枠で10～12人を担当することになったが、最終的には、学生のカウンセリングのニーズが多いことが大学側に認められ、勤務日数を増やしてもらうことになった。

これまでの一連の流れを振り返ると、筆者の場合、職員との関わりから、自分本位のあり方に気付き、まずは、相手を尊重し、謙虚に学び続けることの重要性を学ばせてもらった。そして、その後のカウンセリングにおける変化につながったが、これはどちらかという技術ではなく、人として基本的なことを教わった面が大きい。

プロ野球監督だった野村克也氏（2005）は、選手の成長に関して「人間的成長なくして、技術的成長なし」と述べている。これは技術的成長には、人としての謙虚さや成長が伴うことが不可欠であると指摘したものであるが、このことは臨床に当てはまることが多い。もし、カウンセラーが、技術的・理論的理解だけを先行させると、学生が置き去りにされ、学生本人が深く傷つくことになる。

そのため、カウンセリングの技術の進歩だけを追い求めるのではなく、まず、カウンセラーが目の前に生きているその人から学ぶという謙虚な姿勢が必要となる。つまり、カウンセリングにおいては、単純に技術を習得するだけでは明らかに不十分であり、人間的な成長や様々な気づきが、カウンセリングの深化と密接に結びついているといえる。

V. 新たに生じた課題と取り組み

1. 周囲の関係者との「連携」の難しさ

学生との会い方が変わり、継続面接が増えていったが、その分、新たな困難に直面するようにもなった。そのうちの 하나가、学生の修学面、生活環境など、学生の様々な「現実」を考慮し、対応する必要が増えたことである。

例えば、気分の落ち込みを主訴として来室した学生がいた場合、一見、心理的なことが課題であるかのように見える。しかし、落ち込みの背後には、家庭が経済的に困窮しているため、生活費や学費を稼ぐために、本人が深夜にアルバイトをせざるを得ず、生活リズムが崩れている場合もある。そして、睡眠不足、集中力を欠いたまま日中の授業に出るため、課題やグループでの研究も忘れがちになり、周囲や指導教員からの信頼を失い、修学面での困難に繋がっていることも少なくない。

この場合、カウンセリングで、本人の落ち込みや傷つきを扱うことは重要であるが、それだけでは十分ではなく、カウンセラーが、学生を関係機関や利用可能な資源とつなぎ、連携するなど現実面での関わりが必要になる。

例えば、経済面では、奨学金を得られるように関係する学内部署と連携し、アルバイトの頻度を減らすことで、本人が身体的に休め、生活における安心感が増えることが重要であろう。また、学業に関しては、指導教員にカウンセラーが本人の状態を説明し、本人の状態に見合った量の課題を

出してもらいなどのサポートを受けることも必要になる。このように、学生が生きる現実や学生を取り巻く「環境」に働きかけることで、学生が自らの生活を立て直し、学生が本来有する能力が発現しやすい環境を作ることが重要になる。

しかし、このことは、現場に出たばかりのカウンセラーにとっては、ハードルが高い。

まず、学内組織や資源に関する知識が不足し、仮にそれらの資源を知ったとしても、それらをどのように学生のために活かすのかという理解が足りないことが多い。

加えて、カウンセラーが連携そのものに不慣れな場合も少なくない。これは、大学院の訓練において、カウンセリングにおける時間・場所・秘密という「枠」を守ることの重要性を何度も指摘されているため、学生の問題や秘密を「外」に漏らさずに面接内で扱うべきという意識をもってしまふことに依るところが大きい。そして、「面接外」の人々と連携することは、これらの原則から離れてしまい、「心理面接ができていない」という葛藤や自責の念に苦しめられることになる。

筆者の場合も、次々と現れる学生の現実的な問題に直面する度に「どこまで周囲と連携をしても良いのか」と悩むことも少なくなかった。また、少しでも学生の守秘に関する話が漏れ出てしまうと、学生との信頼関係が一気に失われてしまうため、話す内容を何度も練り、連携先の職員や教員の立場を鑑みて、彼・彼女らに伝わるように言葉を選んで話すことも容易ではなかった。それは、相当、神経を使う作業であり、ある意味、学生本人とのカウンセリング以上に疲弊した。

また、非常勤の場合、学生個人の心理相談が中心になることが多く、学内組織の人との関係も希薄であることや、時間的な制約も連携を難しくする大きな要因であろう。当時の筆者も、週1日の非常勤での勤務で、学生との継続面接が増えたため、教職員と話す時間は面接の合間の10分か、全ての面接が終わった17時以降しかなかった。

た。17時以降だと大学の関係部署の窓口が閉まっている場合もあり、非常勤ではやはり対応に限界が生じることも少なくなかった。

2. 連携する上で有用だったこと

このような中、筆者が最初に勤務した学生相談室には、教員とカウンセラーを兼務する先輩方がおられ、これらの人々から多くのことを学べたことは意義深かった。

これらの先輩カウンセラーは、教員として所属学部の教授会に参加しているため、教員の立場をよく理解され、さらに学部・事務組織がどのように動くかについても熟知していた。そのため、筆者も学内の状況や、学内にいかなる資源があるかという全体の地図を得られた上に、教員や職員がどのように仕事をし、いかなる原理や心情で動くのかを知るまたとない機会となった。

また、先輩カウンセラーが必要に応じて学生のために関係組織との連携を行っていたのを間近で見られたが、カウンセリングの原理・原則を守ることに必死だった筆者としては、連携をすることのそもその意義や、どのように連携をすれば、学生の成長につながる環境を作り出せるかを知ることができた。

以前、先輩カウンセラーが、教職員と話す際の言葉が外国語のように聞こえていた会話も、注意深く聴くと、「教職員」に通じる言葉と、「学生の理解」をベースにした言葉の両方が混ざっていたために、どこか通訳言語のようであることに気づいた。また、話される内容も複合的な要素を含んでいたために、やや含みのある言い回しが多かった。これは、教職員と学生という両方の立場を知り、双方をつなぐ通訳のような仕事を先輩のカウンセラーが行っていたためであろう。

このようにして、筆者も次第に学生と教職員の両方に伝わる言葉を自分なりに生み出していくことの必要性を感じ、どのようにすれば、学生の秘密が守られながら、学生の主体性が尊重され、成

長できる環境を作れるかを考えていく貴重な機会となった。

3. 臨床力と知識不足

色々な理論を一旦横に置き、学生の話を丁寧に聴くようになると、新たな問題が生じるようになった。一つは、学生の相談内容が、以前思っていたよりも複雑であり、一つの考え方やアプローチだけでは対応できないことが増えたことである。そして当然のことながら、学生を理解し、自分がカウンセラーとして関われる「幅」を広げる必要性が生じたのであった。それまでは、特定の理論や考え方を参照し、気づかぬうちにそれらに学生の話当てはめていたために、ある意味で、学生について「考える幅」が限定されていた。そして、幸か不幸か、それ以上考え、新たに何かを学ぶ必要性がなかったのであるが、学生の気持ちに貪欲についていこうとする中で、それまで触れてこなかった学生の心情や状況に触れることになり、様々なことを新たに学ぶ必要性を改めて感じたのであった。

このことを図に示したものが図1と図2である。図1は、転機となる出来事の前状態を示したものであるが、大きな円は、カウンセラーと心

理的要因、そして学生の一部分にしか掛かっていない。これは「心理の専門家」であろうとし過ぎるため、学生の話の「心理的」な部分にしか焦点を当てておらず、学生を構成する他の要因が抜け落ち、学生との関係を示す線も途切れている状態である。

図2は、学生の話に基づきカウンセラーが色々な要因を考慮し、学生の状況や心情、立場を考え、それらを一緒に抱えようとする状態である。この中で「心理」は一つの要因ではあるものの、学生に影響を与える他の要因も考慮しているため、学生と学生を取り巻く困りごとと、カウンセラーが、大きな円で囲まれている。また、学生との関係性を示す中央の線も図1よりもより強固なものとなっている。ただし、AとBの場合、明らかにBの方がカウンセラーが考慮する範囲が広く、求められる知識量も多いのが特徴である。

また、筆者に限らず、一般に学生相談の相談内容は心理的な悩みはもちろんのこと、学生生活・家庭・経済状況・修学、そして将来の進路・就職などと幅広い。大学生の場合はある程度の年齢に達しているとはいえ、一人でこれらに対応するには、社会的な経験がまだ少なく、実際は、周りのサポートを得ながら、様々なことを学んでいく段

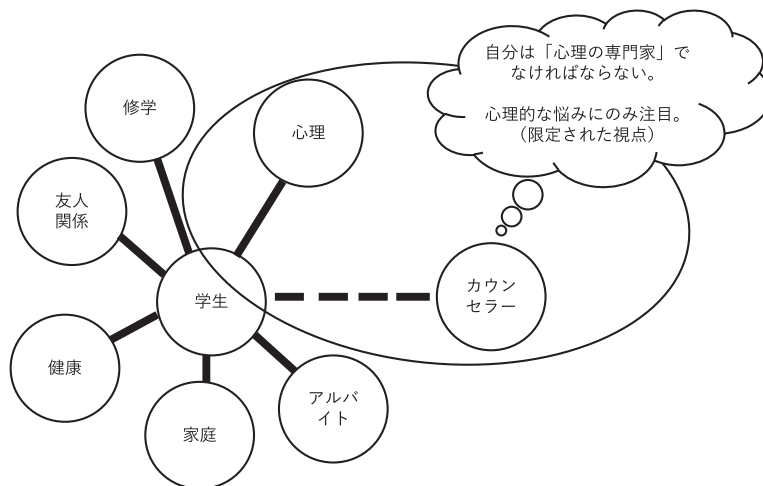


図1 転機となる出来事の前状態の面接の状態

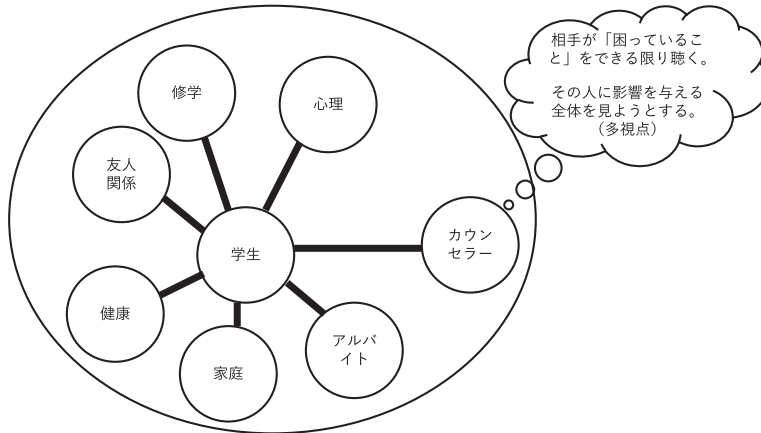


図2 転機となる出来事があった「後」の面接の状態

階にあることが多い。そのため、カウンセラーとしては、心理的な事柄だけに集中するのではなく、学生に関わる可能性のある様々な状況について学び、学生の成長において何が必要になるのかを学ぶ必要があった。

4. 臨床力・知識力不足に対する取り組み

このような状況を受け、筆者は学生とのカウンセリングに一層、注力するようになった。学生の言葉を聴き逃さず、気持ちを少しでも受け止められるように毎回心がけたが、面接では体力と精神力を使うため、できる限り体調管理をして面接に臨むようになった。

また、スーパービジョンにも以前より真剣に通うようになり、スーパーバイザーのコメントが、学生の実態にそぐわず、偏った解釈や理解であると感じられたときは、その違和感について率直に話し合うことが増えた。これは、学生のことで必死だったことが大きく、村度なしにかなりシビアにケースに話し合いたいニーズが筆者側にあったからであろう。時にはバイザーとの間で学生に関して統一した結論・見解に達さないこともあったが、時間を取って、面接でのやりとりや経過、自分が感じ、考えたことを話し合う過程は、

とても貴重であり、学生との面接に肯定的な影響を及ぼすことの方が多かった。

そして、学生相談に関する知識不足については、学生相談室の控え室に掲示されていた学生相談関連の研修会の案内に眼を光らせるようになった。少しでも学生や面接の役に立ちそうな研修会やセミナーを見つけては、できるだけ参加するようになった。不思議なもので、それまであまり関心を持たなかった案内文も問題意識が生まれるととても貴重なものを感じられ、良い企画に出会えると内心とても嬉しい気持ちになっていた。

筆者が参加した学生相談関係の研修会やセミナーは、学生の心理に関することのみならず、危機状況での対応や、学生の奨学金やブラックバイト、経済状況、修学、法律など、幅広い領域を扱っていた。参加し始めた頃は、自分の力量や経験不足もあり、分からないことが多かったが、分からないなりにもとにかく数年間、継続して参加するようになった。そして、少しずつではあるが、自分の問題意識と知識がつかぬようになり、数年後には学生が抱える様々な困難への理解が深まり、対応できる範囲が広がっていることに気づいた。その後、学生との面接に悩んでは、研修会やセミナーに出席し、考える材料や気づきを得て、

また面接をすることを繰り返すことが自然なルーティンになっていった。

なお、筆者が非常に幸運だったのは、教員兼カウンセラーの先生が、在籍するカウンセラーのために研修会やセミナー関連の情報を控え室に掲示してくれたため、常に最新の情報を得られたことであった。多様で新しい情報に常に触れられることは、個人面接が多く、やもすれば時勢に疎くなりしがちなカウンセラーにとっては大変、ありがたいことであった。

また、研修会への参加も積極的に推奨され、学生相談室から研修会の移動費・宿泊費を捻出してくれたことも大きな支えであった。研修に自己負担で参加していれば、参加費や移動費、宿泊費は、相当な額となり、参加を断念せざるを得ない研修会も数多くあったであろう。

このように先輩カウンセラーの先生のカウンセラーの自己研鑽に関する深い理解やサポートがあったために、学生相談に関して学ぶ機会を多く得られたことも非常に大きかった。

VI. 考察

一カウンセラーの専門性と多様なアイデンティティに向けて一

これまで、筆者が学生相談の領域で働き始めた頃の経験と転機になった出来事、そして、その後の変遷を述べたが、最後に学生相談領域におけるカウンセラーの専門性と多様なアイデンティティが形成される可能性について論じてみたい。

筆者が学生相談で働き始めてからしばらくして、相談活動が行き詰まったが、その原因の一つとして筆者の「専門性」の捉え方が影響していたと考えられる。当時は、大学院の修士課程と博士課程で臨床の訓練を受け、臨床実践を始めてから約5年が経過した時であった。この時期は、カウンセラーとしては駆け出しの頃であり、自らの専門性を固めようと躍起になっていたときでもあった。そのため、カウンセリングでは、自分の

意見を言わずに中立的な立場を保ったり、話の秘密を守ったりするなどして、カウンセリングの諸原則を守ることが心の中のかなりの割合を占めていた。しかし、自分が「専門家でなければならない」という呪縛に囚われるあまり、皮肉にも目の前にいる人の話を聞き相手の気持ちを想像する力が弱まる結果となり、面接と臨床実践自体が行き詰まることとなった。

当時の行き詰まりは、精神的に相当苦しく、仕事を辞めることを考えたことは一度や二度ではなかったが、今にして思えば、自分の面接の「上手くいかなさ」に直面し、それに悩み、あがくことは、自分が臨床家として成長する上で必要不可欠なことですらあった。むしろ、筆者の場合、面接が「上手くいく」という発想自体が問題であったといえる。面接が「上手くいく」ことが意味するところは、自分が考える臨床心理の枠組みや流れに学生を当てはめ、学生が右肩上がりに良くなり、カウンセラーが望むように面接が展開することを意味していた。しかし、それは、学生をないがしろにすることに他ならず、そのようなカウンセラー本位の面接が行き詰まるのも当然の結果であった。このように、面接の行き詰まりとそれに伴う悩みや葛藤は、それまでの自分を問い直し、自分の臨床実践の土台を作る上でも避けて通れない重要な時期であった。

その後、ある職員との出会いが、筆者が学生と会う姿勢が変わる契機となったが、そこでの大きな気づきは、面接の原則や臨床の理論は重要であるものの、それが「学生に取って代わるもの」ではなく、あくまでも「学生が」中心に来るということであった。

学生を第一に物事を考えるようになると、安易に理論や心理療法の枠で学生について考えることが難しくなり、学生に関する発言も歯切れが悪くなった。それは、学生が生きる複雑で厳しい現実がより鮮明になり、考慮しなければならないことが増えたためであろう。

そして、理論ありきのカウンセリングや形だけの枠で対応することの限界に気づいたために、逆に彼・彼女らにとって真に枠や守りとなりうるものが「何」であり、それらを自分がいかにして実践できるかをゼロから考えるようになった。こうして筆者の姿勢は、頑なに専門家としての原理原則を「守る」というものから、学生のための臨床実践へと方向性が変わっていくことになったが、原理原則への固執を手放したことで、相手を中心に置くという最も大事な原則や基本に立ち戻ることができたのである。

ここで誤解のないように付言しておく、筆者は大学院での臨床活動や訓練が不要とっているわけではない。それらの訓練は現在も筆者の実践活動の基盤となっている。しかし、現場の状況やニーズを見ずに、それまでの「型」にのみ依拠（もしくは依存）した場合、型にはまらないものは排除されてしまい、柔軟性が失われ、全体が硬直化し、多くの弊害が生まれる危険性があることを認識しておく必要がある。言い換えると、専門領域における臨床実践の質の高さは、重要である一方で、それらが様々な現場に対応できるものでなければ、専門性とは言い難いのではないだろうか。そして、目の前の一つひとつの状況に柔軟に対応しながら、また同時に、常に基本に忠実に立ち返る姿勢も併せ持つことで、専門性がより担保されていくように思われる。

現在、日本の学生相談機関で働くカウンセラーは、所属する大学の方針や入学する学生の変化の影響を強く受け、様々な状況下で臨床実践を行っている。また、入学する学生層も多様化し、カウンセラーに求められるものも個別のカウンセリングに留まらず、複雑化している。そのため、これらに対応可能な専門性や多様なアイデンティティを形成することが重要な課題になりつつあるが、それら実現するには多くの困難が存在すると思われる。

しかし、筆者を例にとると、何か「確固たる」

臨床心理という専門性やアイデンティティを守り通して自分の専門性なりアイデンティティを形成しようとしているわけではない。むしろ、失敗をし、職員や学生、先輩のカウンセラーなど「現場の人々」の影響を受けの中で、学生相談領域における自分なりの専門性や、アイデンティティが少しずつ形作られていった。それは、「現場性」とでも言うべきものとの関係の中で、自分の臨床心理の専門性の幅が広がり、深まったことであり、両者は切っても切り離せない相互循環的な関係にあるといえる。

筆者には、目まぐるしく変わる大学環境や学生相談において、自分の臨床の基本を大事にしながらも、一つひとつの現場が有する「現場性」とカウンセラーが関わりを持つことこそが重要であるように感じられる。そして、現場から学び、それらに臨床的に応えようとする中で、多様かつ弾力性のあるアイデンティティが生み出される可能性があるのではないだろうか。

VII. 本研究の限界

本論では、筆者の体験から学生相談領域におけるカウンセラーの専門性とアイデンティティが形成される過程とその可能性について論じた。しかし、アイデンティティの形成過程は、カウンセラーの個性や、カウンセラーが置かれている職場の状況の影響を受けることが多く、その過程も多様であり、カウンセラーの個性や臨床現場の数だけ、専門性やアイデンティティが生まれるといえる。そのため、相談活動を行うカウンセラーに自身のカウンセラーとしての転機となった体験や現場での体験を聴き、それらを検討・比較・考察することで、学生相談におけるアイデンティティの多様性や多層性を生み出す上でも多くの示唆を富むと考えられる。このことは今後の課題としたい。

文 献

独立行政法人 日本学生支援機構 2007 大学における学

- 生相談体制の充実方策について―「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」―
https://www.jasso.go.jp/gakusei/publication/_icsFiles/afiedfile/2021/02/12/jyujitsuhsousaku_2.pdf (2023.12.4 取得)
- 伊藤直樹 2017 学生相談カウンセラーの専門性形成過程における「難しさ」 心理臨床学研究 35(4) 376-386
- 松木邦裕 2016 私説 対象関係論心理療法入門 精神分析的アプローチのすすめ 金剛出版
- Maples, M. 2000 Professional preparation for college counseling: Quality assurance. In D.C. Davis & K.M. Humphrey (Eds.) *College counseling: Issues and strategies for a new millennium*. Alexandria, VA: American Counseling Association 57-70
- 中島正雄・富澤和歌子・片岡彩・荒井裕子 2015 学生相談に携わるカウンセラーの成長モデル作成の試み―新入期の成長プロセスに着目して 学生相談研究 35(3) 173-185
- Neimeyer, G.J., Bowman, J., & Stewart, A.E. 2001 Internship and initial job placement in counseling psychology: A 26-year retrospective. *Counseling Psychologist* 29 763-780
- 日本学生相談学会 2023 日本学生相談学会の資格認定制度 <https://www.gakuseisodan.com/cmt/cert/guide/doku.php?id=start> (2023.12.8 取得)
- 野村克也 2005 野村ノート 小学館
- 齋藤憲司 2015 学生相談と連携・協働：教育コミュニティにおける「連働」 学苑社
- 坂本憲治 2012 学生相談カウンセラーの職業的発達に関する質的研究 学生相談研究 32(3) 187-200
- Sharkin, B.S. 2012 *Being a college counselor on today's campus: Roles, contributions, and special challenges*. New York, NY: Routledge
- 吉武清實 2005 改革期の大学教育における学生相談教育心理学年報 44 138-146

ABSTRACT

On the Specialization and Diverse Identity Formation of the Counselors in Student Counseling:
From Clinical Training to Clinical Environment

NISHIURA, Taro
Konan University

Many of the counselors working at counseling centers in Japanese higher education institution have received clinical training in psychology at graduate schools. It has been indicated that there are various hindrances which make the formation of the specialties in the field difficult.

In this paper, the experience of one counselor who almost finished his clinical training at graduate school and started his carrier at a Japanese student counseling center was presented and the difficulties were discussed.

Finally, the students and the people working on the ground is an inevitable part in building the counselor's specialty and identity as a counselor who is working in this field.

Key Words : student counseling, specialty, identity
